

小論文

法文学部（人文学科 多元地域文化コース）

注意事項

- 一、「解答始め」の合図があるまでこの冊子は開かないこと。
- 二、この冊子は、表紙を除き七ページである。
- 三、「解答始め」の合図があつたら、まず、黒板等に掲示又は板書してある問題冊子ページ数・解答用紙枚数・下書き用紙枚数が、自分に配付された数と合っているか確認し、もし数が合わない場合は手を高く挙げ申し出ること。次に、受験番号・氏名を必ず解答用紙の指定された箇所に記入してから、解答を始めること。
- 四、解答は、必ず解答用紙の指定された箇所に縦書きで記入すること。

次の文章を読んで設問に答えなさい。

ぼくは、かれこれ一〇年ほど「文学者」という仕事をさせてもらっている。なんだか捉えどころのない肩書き(職種)で、何がどうなったら「文学者」と名乗ってよいのかむずかしいところだけれど、とにかく、日々、読んだり、書いたり、耳を傾けたりして、言葉の問題について考えることを仕事にしている。

「言葉の問題について考えることを仕事にしている」というと、むずかしい漢字をたくさん書けたり、語彙(ボキャブラリー)が豊富だったり、文法に詳しくあったり、といった「言葉の先生」というイメージを持たれることが多いのだけれど、残念ながら少し違う。ぼくの仕事は「言葉そのものについての研究」というよりも、「この社会に存在する数々の問題について『言葉という視点』から考えること」といった方がしっくりくる。

学者が自己紹介をするときは、自分の専門分野を紹介することが慣習になっているので、ちょっとだけ専門の話を書かせてほしい。

ぼくの専門は「被抑圧者の自己表現活動」。こう書くとなんだか仰々しいけれど、簡単に言うと、この社会の中で、いじめられていたり、差別されていたり、不当に冷遇されていたりする人たちは、厳しい境遇にいる自分のことをどのように表現するのだろうか——といった問題について研究している。

どうして「自己表現」を研究テーマにしたかという点、ぼく自身「自分で自分を表現すること」が苦手だったからだ。小さい頃から、自分の中に「表現」するに足る何かが存在するなんて思えなかったし(基本的にぼくは「自己肯定感」なるものが低い)、いまでも自分の感情を強くはつきり表明することは得意じゃない(あまり「否」を言えないタイプかもしれない)。

そんなぼくは学生時代、とても誠実な「自己表現」をする人たちに出会った。病気があったり、障害があったりして、日々の生活も大変なのに、それでも「自分らしい言葉」で社会の理不尽と闘ったり、世間の冷たい風をいなしたりしながら、人生を楽しむ人たちに会ったのだ。

その人たちの多くは、障害者運動や患者運動に関わる人たちだった。こうした「運動」に関わる人という、世間的には「特別」か「偏った」というイメージを持たれることが多いけど、ぼくが知っているその人たちは、割と「普通」で「平凡」だったように思う。

ぼくと大して変わらない「普通の人」が、いろいろと試行錯誤、七転八倒しながら、自分がここに存在しているという事実を自分の言葉で表現していた。

嫌なことは「嫌」と言い、否の場合は「否」と言い、楽しいときは顔をくしゃくしゃにして笑い、怒ったときはむちゃくちゃに怒っていた。そうした人たちの喜怒哀楽をともなった言葉から、この社会が抱える問題の多くを学んだ。

とても陳腐ちんぷな言い方だけど、それはとにかく魅力的だった。あの頃に味わった「言葉への感動」の蓄積が、その後のぼくを作ったと思う。

そんなこんなで、言葉を考える仕事についたぼくは、いま、猛烈な危機感を覚えている。ぼくたちが生きるこの社会に、ある不気味な言葉が溢あふれているということに。

その不気味さを説明するのはむずかしい。でも、強いて言えば「言うのは簡単だけれど、言えば言うほど息苦しくなる言葉が増えてきた」ということになるだろうか。

ひとつ、ぼくの周囲で起きた例を挙げて説明したい。

ぼくが慕っていた先輩(仮に「Aさん」としておく)が、職場のハラスメントが原因でうつ病になり、苦しい思いをしたことがあった。症状そのものもつらそうだったけど、それよりも苦しそうだったのは、「うつ病になった自分」を受け入れられない自己認識のトラブルみたいなものだった。

Aさんは、とにかく仕事を休むことを嫌がった。心配した人からクリニックの受診をすすめられても、かたくなに拒んだ。自分はそのなかに弱くない。ここで怠けたら職場に戻れなくなる。そう言って毎朝、定時に家を出続けた。

ある日、重い身体を引きずるようにしてバス停のある国道を歩いていると、Aさんの頭に「あの大きな車の下に飛び込めば楽に

なれるかも……」という考えがよぎった。

次の瞬間、Aさんは急に怖くなって道路標識の支柱にしがみついた。

この体験をきっかけに、Aさんは自分の限界を自覚したらしい。

のちのち、Aさんの状態が落ち着いてから話を聞いたけど、なんとも複雑な気持ちになってしまった。

その職場には以前にも、心を病んで休職したり、出社しても簡単な仕事しかできない社員がいたらしい。Aさんは、そういった人たちを陰で非難していた。「仕事ができない人がいるから、こちらの負担が増えて困る」とか、「あれで給料もらえるならうらやましい」とか、そんな愚痴めいた陰口だった。

とはいっても、Aさんは特に「悪い人」という感じではない。多忙な職場の愚痴の吐き合いみたいな場では、ついついこうした言葉がこぼれてしまうことはあるだろうし、なんとなくその場の雰囲気に合わせて同調してしまったりすることもあろう。Aさんも、そんな感じで毒っぽい言葉をこぼしていたのかもしれない。

そのAさんが、自分もハラスメントの被害を受けたことで、つらく苦しい状況に追い込まれてしまった。気持ちも身体も、重くて、苦しくて、つらい。頭では、がんばりたいし、がんばらなきゃいけないとは思っていても、どうしても身体が動かない。

Aさんは、それまで自分が非難していた人と同じ状況になってしまった。そして、いままで自分が言い放ってきた冷たい言葉が、自分にも跳ね返ってきてしまった。

こうしたしんどい状況に直面して、Aさんはどう対処したか。「ああいう人たち」と思っていた立場に自分がなってしまったと認めるのが怖くて、それを否定したくって、誰かに助けを求めるところか、重い身体にムチ打って無茶苦茶にがんばってしまったというのだ。

どこかの職場や学校で、誰かが心を病むほどのハラスメントが起きて、それが問題になったりすると、しばしば被害者に対して「やめてって言えばよかったのに」とか、「被害を訴えればよかったのに」とかいった言葉が投げかけられたりする。

でも、それはかたちを変えた自己責任論。こういった言葉に、どれだけの人が黙らされてきたのだろう。

ハラスメントというのは「個人的な問題」だと思われがちだけど、本当は会社とか組織の在り方が問われる「社会的な問題」だ。その「社会的な問題」に個人が直面しているのであって、ハラスメントで傷つけられることは「個人的な問題」なんかじゃない。

だからこそ、相談できる機関を整備して、被害を私事化させないことが大事なんだけど、ハラスメントの怖いところは、個人から「相談しよう」という発想そのものを奪ってしまうところにある。

しかも、Aさんの場合は、なんともやりきれない。自分が「ああいう人たち」に対して放ってきた言葉に、自分自身が苦しめられる負のスパイラルに陥ってしまったのだから。

ハラスメント被害者への「やめてって言えばよかったのに」もそうだけど、本来なら社会の問題として考えなければならぬことを、特定の個人に押しつけようとする言葉をよく見聞きする。

こうした言葉というのは、「言う」のはとても簡単だ。深く考えなくていいし、手間もかからない。ちょっと「上から目線」で言えるから優越感も味わえる。

でも、この種の言葉は、言えば言うほど息苦しさが増す。自分も息苦しくなるし、周囲も息苦しくさせる。

最近、病気がある人、障害がある人、高齢になった人、貧困状態になった人、家族に何らかの問題を抱える人、犯罪被害に遭った人などのことを、「生きづらさを抱えた人」という言葉で表すことが増えた（なんだか回りくどい表現だけど、とりあえずこの言葉を借りておこう）。

冒頭でぼくが書いた「危機感」というのは、実はここに関わってくる。「言うのは簡単」だけど、「言えば言うほど息苦しくなる言葉」が社会に溢れて、こうした「生きづらさを抱えた人」を黙らせようとする圧力が急速に高まってきているように思うのだ。

言葉には「降り積もる」という性質がある。放たれた言葉は、個人の中にも、社会の中にも降り積もる。そうした言葉の蓄積が、ぼくたちの価値観の基を作っていく。

「心ない言葉」なんて昔からあるけど、ソーシャル・メディアの影響で「言葉の蓄積」と「価値観の形成」が爆発的に加速度を増してきた。しかもその爆発を、誰もが仕掛けられるようになってきた。

それが怖い。

「誰かを黙らせるための言葉」が降り積もっていけば、「生きづらさを抱えた人」に「助けて」と言わせない「黙らせる圧力」も確実に高まっていくだろう。

Aさんが直面した「心の病」も、「弱い」「甘えてる」「怠けてるだけ」なんて言われることが多い。本人も「心の病」で休職した同僚のことをそう言っていた。でも、そうした言葉が積もり積もって、本人がその「圧力」に潰されそうになってしまった。

忙しくて疲れていれば、「こっちだつて大変なんだけど」と愚痴のひとつもこぼしたくなる。毒づきたいときだつてある。ぼくだつて、そんな感情と無縁で生きてるわけじゃない。

でも、「生きづらさ」の重さ比べをしても決して楽にはならない。むしろ、結果的に「黙らせる圧力」を高めてしまうだけだ。

こんな「圧力」を高めてはいけない。理由は「生きづらい人が可哀想だから」じゃない。「可哀想」というのは、「自分はこうした問題とは無関係」と思っている人の発想だ。

こうした圧力は、「自分が死なないため」に高めてはいけないのだ。

残念なことに、「黙らせる圧力」は黙っていても弱くはならない。これに抵抗するためには、ぼくたちは何か言葉を積み重ねていかなければならない。

でも、どんな言葉がいいのだろうか？

ありきたりなことかもしれないけれど、それは過去に学ぶしかない。例えば、こんな言葉を綴った人がいる。

ある視点からすればいわゆる気が狂う状態とてもそれが抑圧に対する反逆として自然にあらわれるかぎり、それじたい正常なのです。

精神病への偏見がいまよりもずっと強かった一九七四年、「全国『精神病』者集団」という団体が結成された。「精神病患者」が連帯して差別や偏見に立ち向かい、患者の人權を軽んじる精神科医療の問題を厳しく指摘した団体だ(いまもし続けている)。

引用したのは、ここに参加した吉田おさみ(一九三〇―一九八四年)の言葉。当時、「心を病む」ことは、「その人が弱い・悪い・おかしい」で片付けられていた。心を病んだ人は、とにかく薬を飲ませておくか、長期入院させておけば「問題は解決した」と考えられていた。

その理不尽さに対して、吉田おさみは黙っていなかった。心を病むのは(抑圧に対する反逆)として(正常)なのだと言い切った。この言葉のすごいところは、返す刀で「では異常なのは何? 誰?」という問いを突きつけてくるところだ。

当たり前だけれど、環境や条件さえ整えば、誰の心だって壊れうる。だとしたら、「心を壊しにかかってくるもの」の方が問題だ。この言葉を知ると、人の心が壊れうることへの想像力のない人が社会のあり方を決めていくことの恐ろしさがわかるだろう。「心を病む」ということのイメージを根底から変えてくれる一言だと思う。

自分の中にある価値観や先入観を揺さぶって、より深く考えるきっかけを与えてくれる言葉を「名言」と呼ぶのであれば、これはレジェンド級の「名言」だ。「世界遺産」ならぬ「言葉遺産」がもしあったとしたら、真っ先に推薦したい言葉だ。

ある人の「生きる気力」を削ぐ言葉が飛び交う社会は、誰にとっても「生きようとする意欲」が湧かない社会になる。ぼくは、そんな社会を次の世代には引き継ぎたくない。

〔出典〕『まとまらない言葉を生きる』荒井 裕樹著、柏書房、二〇二一年

※出題にあたり原文の一部を改変し、常用漢字表を参照して一部にルビを加えた。

設問一 本文の内容を四〇〇字以内で要約しなさい。ただし、句読点および改行のために生じる空白も解答文の字数に含む。

設問二 著者の主張を踏まえつつ、「言葉の力」についてあなたの考えを六〇〇字程度で述べなさい。ただし、句読点および改行のために生じる空白も解答文の字数に含む。(解答欄は七〇〇字)

